

「被災女性支援のためのポータルサイト」をつくりました。

次に通常事業の再構築です。すでに新年度の計画はできていましたが、4月以降の講座は「心のケア」を第一に考え内容を組み替えていきました。

エル・ソーラ仙台は4月5日から再開し、29階の市民交流スペースを「こころと暮らしの立ち直りを支援するスペース」として開放しました。市民が集える場を開くと人が来るようになり、情報が入ってきて「まだやっていくことがあるね」と思うようになりました。

自分の身辺が落ち着いてきた人たちは避難所に行つて現場の状況を聞かせてくれるようになりました。「入社式に着て行く洋服や靴がないので欲しい」「津波で全部流され物がない」など、被災者のニーズを聞きながら、「こういうことを事業化していくのが私たちの仕事ではないか」ということに気が付きました。そこでエル・ソーラを拠点にして中間支援、間接支援という形ができたらいいなと思い始めました。

洗濯代行支援 「*せんたくネット」

「せんたくネット」は、情報交換から始まりました。電気や水道が止まって洗濯ができない人に「代わりにやってあげたら喜ばれた」という話を聞き、「これくらいのことだったら力になれる人たちが仙台市内に絶対いる」と考え、女性ボランティア限定の洗濯代行を始めました。

具体的には、
①運搬ボランティアが避難所に行つて「洗濯物がありますか？」と洗濯物を集めてくる。

②「今日は何個です」とエル・ソーラ仙台に電話で連絡が入る。

③連絡が入ったら、仙台市内の洗濯ボランティアの女性約300人に電話をかけ、今日洗濯してくれる人を探す。

④エル・ソーラ仙台に来てもらい、1人1袋ずつ持つて行ってもらう。これを週2回やりました。

5月初旬までは、市内の避難所でも洗濯機がありませんでした。6月か

らは水が出ない南三陸町のホテル避難所の洗濯を代行しました。女性ボランティア限定だから安心して任せられるように感じました。

洗濯代行の方法は、最初からシステマティックに行なえたわけではなく、次から次へとやり方を変えて柔軟に対応していきました。朝決めたことが夕方には違っていくことが頻繁にありました。誰が誰と話し合つて判断を下していくか、日頃の関係性、判断する能力が問われました。

被災者のニーズは、発見する側に視点がないと見えません。被災して疲弊している人たちに「なにが必要ですか？」と聞いても、「別に…」と返されます。「〇〇はありますか？」△△を持って来ましようか？」とたずねると「××なら欲しい」等の答えがもらえます。いったん信頼関係ができると、細かなニーズを拾うことができようになります。

そのようなやりとりの中でブラジャー、サニタリーショーツが不足していることがわかり、200枚以上集めてサイズ別に渡せるようになりました。たくさんの中から自分の好きなものを選ぶのは気分が高まり、自己肯定感をもちやすくなりました。

「何かできることは…」 の思いにこたえる

洗濯ボランティアをした仙台市内の女性たちの心情はどうだったのでしょうか？

「昼は仕事しているからボランティアに行けない」「子どもがいるから…」
「私には何もできない…」などに始まり、「津波の被害に比べたら自分の被害はなんてことない」「私は被災していない」と考える人もいました。しかし、話を聞いていくと凄く傷ついていました。特に、「何かやらなくちゃ…でも、何もできない」と思う人たちが多く、その「思い」が支援に関わっていくきっかけになりました。

ボランティア後は、「洗濯をさせてもらった」「少しでもできることがあった」「良かった」という声があがりました。避難所に送る下着を募集すると、「役に立ちたかった」「そういう機会があつて良かった」と言つて下着を持つて来てくれる人もいました。

*せんたくネット

せんだいの女性たちが、たくさんの女性の本音を汲み取って、一緒に解決するネットワーク。

